急ぎ過ぎだよ 人類は。

ゆるやかなネットワークを目指す

ITより逢いてエ

雑報 縄文

いろんな考えがあるから面白い
いろんな人がいるから楽しい

No.634
2022年10月
晩秋

編集・発行 鈴木厚正
〒266-0005 千葉市緑区誉田町2-21-359
T&F 043-291-2917

も・く・じ

	ページ
あの山の向こうに (159)	2
耕さない農業を読む	4
「二つの軸足をもうとした技術者」(5)	6
「現代社会の理論」	8
お便りから	12
『まちおこしは総力戦で』	17
岡山でテニスと観光	21
け・い・じ・ば・ん	26

マイナンパカード

佐藤 正明 2022・10・16

ぼくはまだ番号通知を開封していない。カード取得は任意といいながら、健保証との一体化で事実上強制とは。「日の丸君が代」と同じでやり方が汚い。

▲2名

10月23日現在の
会員数212名

この見本誌をみて新たに「読んでみようか」という方は、年会費4,000円を郵便局で 00100-2-20630 「雑報友の会」へ振り込んで下さい。

題字：故佐村隆英和尚（元千葉県長柄町本光寺住職）
カット：泉ゆきをさん（にっぽん箱絵の会会長）

印刷機 リソグラフRZ330

※この号の切手は、日中国交正常化50周年（50年前のこと、忘れちゃったんだね）

『まちおこしは総力戦で挑め』PHP研究所 1500円+税

神奈川県小田原市は、三方を箱根山地や丹沢山系の山々に囲まれ、前面は西湘の海。人口はかなり多いだろうが市域は狭く感じる。その分、人のまとまりがよいのかもしれない。

著者蓑宮武夫さんは、ソニーの上席役員だった。ふつう、重役を退任後は悠々自適を決めこむ人が多いように思われる。しかし、蓑宮さんは違った。ソニーに勤めていた頃は寝に帰るだけだった小田原。退任後、小田原のまちの活性化のため、存分に腕を振るったのだ。その無償のエネルギーは、どこから生まれたのだろうか。

小田原が生んだ偉人、二宮金次郎。その思想の中に「推譲（すいじょう）」がある。働いた結果として人は多くのものを手に入れる。自分に必要以上の余剰が生まれると、世いたくをしたくなる。しかし、それでは社会貢献にならない。その余剰を惜しみなく社会や他人のために譲る。即ち「推譲」こそが幸福な社会をつくるというのだ。蓑宮さんの働きをみると、まさに「推譲」を実行しているようだ。その一部を紹介する。

- 東日本大震災で小田原市に大きな被害はなかったものの、「計画停電」に悩まされた。そこで、自分たちの手でエネルギーを守っていこうという動きが始まった。社名の「ほうとくエネルギー（株）」は、二宮金次郎の「報徳思想」に基づく。蓑宮さんは社長になったが、一銭の給料ももらわない。

  必要な資金は市内の信用金庫、百貨店、蒲鉾店、建設、ガス、タクシー、不動産、IT企業など38社が出資してくれた。

  ソーラーパネルを買う資金は、地元の信金から借り入れる。それで信金には利息が入る。耕作放棄地にパネルを設置すると農家に賃料が入る。メンテナンスは地元企業へと地元にお金が廻るようにした。

2012年12月、ほうとくエネルギー設立記者会見（左より、吉川伸治・神奈川県副知事（当時）、加藤憲一・小田原市長（当時）、鈴木博晶・鈴廣社長、筆者）

- 2020年秋には「小田原ワインプロジェクト」がスタートした。古くから小田原ではミカンが栽培されてきたが、輸入の増加や嗜好の変化で消費が減り、耕作放棄地が増えた。小田原の地に合うブドウの品種「メイヴ」を選定。荒れ地を整備した上で、総勢100名のボランティアの手で700本の苗木を植えた。2023年から収穫が見込まれ、いずれは市内に醸造所をつくることを目指す。
- 蓑宮さんは映画好きだ。小田原の誇りである二宮金次郎の生涯を、ぜひ映画にして後世にのこしたい。

市民応援団の団長となって製作プロジェクトを支えることになった。企業や団体、個人からも寄付を募り、映画のエンドロールにその名前を流した。写真は主演した田中美里さんと。

（おや、みのみやさんと にのみやさん、似ていますね。）

- 小田原には、100年以上前から福祉活動を行っている「宝安寺社会事業部」がある。もとは1900年に曹洞宗の住職が、教育の機会に恵まれない子どもや青年男女のために、特殊夜間学校と和洋裁縫女学校を設立したのが始まりだ。こうした土壌のもと、小田原には26もの障がい者支援施設がある。
- 小田原を訪れる観光客のガイドを務める団体がある。NPO法人「小田原ガイド協会」は20年以上の歴史を持ち、224人のメンバーがいる。外国人観光客に通訳ガイドを行うボランティア団体もある。海外駐在経験者も多く、英語のほかに中国語やスペイン語、フランス語、イタリア語にも対応できる。
- こうしたボランティア団体は、主に高齢者によって支えられている。高齢者といえば社会的には弱者とみられがちだ。だが、一体誰が弱者で誰が強者だろうか。いったん大災害に襲われたら、みんなが被災して弱者となる。大切なことは自分で決めつけないこと。身体が不自由でも、誰もができることがある。できない理由を並べるのではなく、自分がいまできることを探すこと。
- 県下最古の市民劇団「こゆるぎ座」が存続の危機に陥った。手弁当で活動しているが、公演にはお金がいる。コロナ禍で飲食店には保障がされたが、どうして劇団には保障がないのか。国にとって芸術や文化活動など二の次ということか。もしそうだとしたら、なんと寂しい、なんと心の貧しい国だろうか。
- 有名な歌舞伎十八番「外郎売（ういろうう）の口上」をつくったのは二代目市川團十郎だ。持病の咳と痰のためにうまく台詞が言えない。よい薬を探すうちに出会ったのが小田原に古くからある「ういろう」という薬だった。團十郎は感謝をこめて舞台で「外郎売の口上」を演じたのが、今日まで受けつがれている。

「外郎売の口上」の文化を遺したい。そんな思いで立ち上げたのが「外郎売の口上研究会」。善波裕美子さんが手弁当で代表を務める。年に一度「外郎売の口上大会」を開催し、多くの市民が参加する。本家の（株）ういろうは、社員と家族が応援に駆けつける。いま「外郎売の口上」は、アナウンサーの新人研修に用いられている。

- 小田原のお隣り箱根には、京都に並ぶ芸者衆がいる。その一人優美子さんは、同志社大学の教授だった父を持つ帰国子女。大好きな三味線を弾いて暮らしたいと、芸者になった。コロナ禍で客が遠のくと「芸者とオンライン飲み会」を始めた。

語学が得意な優美子さんは、「Zoom」を使って完全英語対応のオンライン飲み会を始め、大人気となった。昨年は、東京芸術大学卒業の結糸（ゆい）さんが芸者の修業中だ。（写真は結糸さん）

- そんな小田原に強力な助っ人、溝口久さんがやってきた。

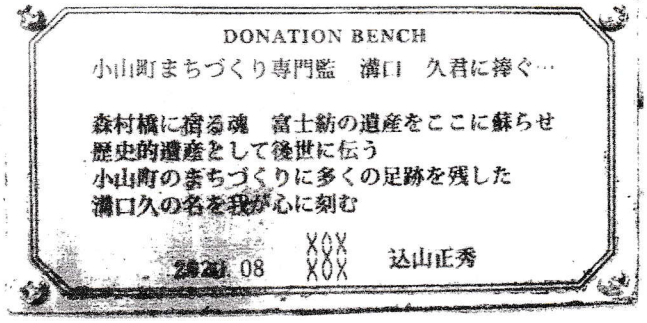
久さんは、40年前に一級建築士として静岡県庁に入庁。公営住宅の建設や審査を担当したのち都市計画課に移り、都市マスタープラン策定などを担当する。一時期、県下の豊岡村（現磐田市）に出向。鈴木正士課長のもとで働いたこともある。

久さんが大化けするのは1995年。大分県の由布院温泉観光協会の事務局長公募に応じて就任してからだ。そこには、中谷（なかや）健太郎（亀の井別荘）、溝口薫平（由布院玉の湯）というお二人がいた。ぼくも辰巳朱子さんの「良い食材を伝える会」の事務局をお手伝いしている時にお会いしたことがある。かつて、別府の奥、片田舎の温泉だった由布院（町名は、湯布院）を、全国でも一、二を争う温泉地に育て上げた人物である。久さんはお二人の薫陶を受けて花開いた。（大輪だね）

いったん県庁に戻ったが、富士山の麓にある小山（おやま）町の込山（こみやま）町長に請われて移り住む。派遣ではなく退路を断って（退職して）の移住である。

最初に依頼されたのは「ふるさと納税」だ。返礼品といえばコシヒカリと水掛け菜（富士の伏流水をかけて育てる）くらいと尻ごみする職員。町内にあるゴルフ場、企業を挙げて説得。職員の目覚め、ふるさと納税額はそれまでの数千万円から、2018年度には29万件余り、260億円まで伸びた。

込山町長はそのお金の一部を、町の歴史を守ると共に魅力を高めるために使った。その一つが、かつて町内で栄えた富士紡績工場の遺構の修復と保全だ。その象徴的な「森村橋」の修復に尽くした久さんを多として、完成した橋の袂に、自らの寄付による鉄製のベンチを置いた。ベンチには右の銘板が付いている。以前、小山町を久さんに案内してもらったときに、ぼくも見ている。



その後、込山町長が選挙で落選という思いがけないことが起き、久さんは小山町を退職。しかし、人は放っておかない。すぐに隣りの南足柄市に移り、さらに茨城県境町の参与、福岡県築上町の地域づくりアドバイザー、神奈川県松田町の官民連携担当と名刺の数が増えている。

蓑宮さんの人脈は広い。さらにそれを補強しているのが久さんだ。本書に出てくる宮崎・都城市や長野・小布施町などは、久さんの人脈を生かしたつながりではなかろうか。

（写真中央は、小布施の町議会議員関悦子さん。左久さん、右蓑宮さん。）

久さん　　蓑宮さん

久さんはいま、「ういろう」の経営者が提供した家に住んでいる。二度「そば会」に参加した正士さんによると「とんでもない豪邸」だそうだ。折があったら行ってみたい。

きりがないのでやめるが、そのほかフットサルチームの応援、女子ソフトボールの監督だった宇津木妙子さんのNPO法人設立にも関わっている。

坂本龍馬の大ファンで「小田原藩龍馬塾」を設立、「松下政経塾」との連携研修も実現した。

いま蓑宮さんが取り組んでいるのは、かつて8館あったのが今はゼロの小田原の街中に、映画館を造ること。すでに予定地も決まり、まもなく実現の見込みだ。

菅原敏一さんの『かがり火』は、残念ながら長いお休みに入った。本書はその一年分を凝縮したように思える。読みやすく、分かりやすい。志ある人におすすめしたい。

（正士さんちの「猫の手文庫」実現を願って、紹介します）

1億円プレーヤー役員最多

国内の上場企業で役員報酬が1億円以上の「1億円プレーヤー」が増えている。22年3月期決算の企業では663人で、前年より119人増え過去最多を更新した。1億円以上の報酬の開示が義務づけられた10年3月期（289人）の2倍以上。

株式関連収入などを除いた報酬と従業員の平均給与との格差が一番大きかったのは、トヨタ自動車の取締役ジェームス・カフナー氏。9億600万円に対し従業員の平均給与は857万円で差は105.7倍。

報酬が1億円以上の役員の平均と従業員の給与の平均を単純に比べると25.1倍の格差がある。高額報酬の役員が増える一方で、従業員の給与の伸びは限定的だ。（7/28、朝日）

一方、経済学者ら100人超の国際研究によると、世界の上位1%の超富裕層の資産が、世界全体の個人資産の37.8%を占めているという。

コロナ禍で貧富の差が一層拡大しているのだ。

（2021年12月27日、東京）